

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：14501

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2020～2023

課題番号：19K21769

研究課題名（和文）日本語非母語話者の特性をふまえた日本語教師養成プログラム構築のための基礎研究

研究課題名（英文）Basic Research on Japanese Language Teacher Program based on the Characteristics of Non-native Japanese Speaker

研究代表者

川上 尚恵（Kawakami, Naoe）

神戸大学・グローバル教育センター・講師

研究者番号：60507713

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本語非母語話者教師（以下NNT）の利点や難点を「特性」と捉え、それを日本国内の日本語教師養成プログラムにどう活かすか考察した。まずNNTへの調査により、NNTの多様な教育実践やニーズなどを明らかにした。またNNTの不安の解消への考察も行った。NNTの利点について、国内や海外といった教授環境の違いに着目し、利点を網羅した枠組みを開発した。NNTの持つ多様な言語資源を活かした教育実践に関する分析と日本語教育実習のピア・レビューにおける非母語話者と母語話者のレビューの観点の違いに関する分析から、非母語話者・母語話者受講者の特性の双方を取り込む必要性とその要素に関する示唆も得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、日本語非母語話者教師（以下NNT）の多様な日本語教育実践を明らかにし、その多様性の共通項を探るため、NNTの利点の枠組みを開発し、国内の日本語教師養成プログラムを構築するための基礎的成果とした。本研究ではこのような結果をもって、従来日本語母語話者を念頭に置いて実施されていた国内の日本語教師養成について問い直し、多文化共生が進みつつある日本社会においても、NNTの特性を活かしたプログラム開発の意義や必要性があることを示した。また、NNTだけでなく母語話者教師に対しても有益な要素について考察し、母語話者と非母語話者が共に学ぶ国内の日本語教師養成プログラムに応用可能な視点を提示した。

研究成果の概要（英文）：In this study, we considered the strengths and weaknesses of non-native Japanese language teachers (NNT) as "Characteristic" and examined how the characteristics can be utilized in Japanese language teacher training programs. In that purpose, through interviews with NNT, we analyzed the divers teaching and needs of NNT and considered ways to alleviate the anxiety of NNT. We also created a framework of the strengths of NNT. We obtained the suggestions on the need to incorporate the characteristics of both native Japanese trainees and non-native Japanese trainees and how to incorporate them into training program.

研究分野：日本語教育

キーワード：日本語教師養成 日本語非母語話者 不安 利点 多様性

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

2018年3月、文化庁はそれまでの日本語教師養成の指針を18年ぶりに改めたが、過去から現在に至るまで、文部省・文化庁が検討してきた日本語教師養成は、日本語母語話者のみを想定したものであり、非母語話者教師は想定されていない。しかし、世界の日本語教師の内、母語話者教師は全体の22.3%に過ぎない(2015年度国際交流基金調査)という海外の傾向や、日本国内でも外国人児童生徒の母語を理解できる日本語教育人材の重要性が指摘されていることを考えると、母語話者教師(以下、NT)だけではなく非母語話者教師(以下、NNT)を念頭においた教師養成プログラムの検討が必要である。これまで特定の国・地域によらない非母語話者を念頭においた体系的な日本語教師養成プログラムは開発されていないため、本研究では、萌芽的な研究として、非母語話者の特性を活かした日本語教師養成プログラムに関する基礎的な調査や課題に関する理論的検討から始め、実践的なプログラム構築のための基礎研究を行うこととした。

日本語教育では学習者の多様性が指摘されることが多いが、本研究を通し、学習者に対峙する教師も多様であり、それぞれの特性を活かした多様な教育方法があるということを経験的にも実証的にも示すことを目指した。本研究のような非母語話者に着目する研究は、直接法を主流とし、日本語・日本文化を背景に持った教師の存在が前提とされている現在の日本語教育のあり方に再考を促すこととなる。英語においては World Englishes が提唱されているように、単一の文化と言語の結びつきを越えた言語観、言語教育観が培われている。本研究は日本語教育のあり方に大きく関わる教師養成の視点から、ネイティブ性(言語及び文化)を重視する現在の日本語教育を変革する可能性、潜在性を持ったものとなる。また、今後日本国内で生活する外国人の増加が予想される中、多文化共生社会を目指す日本社会においても、NNTの多言語・多文化能力は重視されるべきであり、そのためにもNNTの特性を活かしたプログラム開発は必要である。

2. 研究の目的

本研究では、NNTが肯定的に評価される面と否定的に評価される面の両面を「特性」ととらえ、それらの特性を日本語教育の実践でどのようにふまえ、活かすことのできる教師養成プログラムはどのようなものか考えた。これまでNNTの持つ利点として、文法説明に長けていること、学習者の母語での説明ができること、学習者としての経験を有すること、学習者のロールモデルとなりうること、といったものが挙げられる一方、言語能力や正しさへの不安があることが指摘されてきている。本研究では、教師養成プログラムの段階において、NNTが持ちうる不安を軽減し、利点をどう活かすのかを考えるために、次のような二つのリサーチクエスション(以下、RQ)を設けた。

RQ1: NNTはどのような教育実践を行っているか。その教育実践の中で不安や利点はどのように表れるか。

RQ2: NNTの特性を教師養成プログラムにどう活かすか。

3. 研究の方法

上記の二つのRQについて明らかにするため、以下のような調査を行った。

調査1: NNTがどのような教育実践を行っているか、そこにどのような不安や利点などの特性が表れるのかを明らかにするため、母語話者教師が多数を占める日本国内と非母語話者教師が多数を占める海外(学習者数が多く、非母語話者教師の多い地域)で教えるNNTに対しインタビューを行う。

調査2: 教師養成プログラムはどのように実施され、どのような課題があるかを明らかにするため、カリキュラム調査及び科目担当者へのインタビューを実施する。

調査3: 教師養成プログラム受講生の中で日本語母語話者(以下、NS)と非母語話者(以下、NNS)にはどのような観点の違いがあるかを明らかにするため、教育実習科目を受講しているNSとNNSが行った実習授業に対するそれぞれの評価を分析する。

なお、詳細な調査方法及び分析方法については、次の「4. 研究成果」で個別の結果を示す中で述べる。

4. 研究成果

4-1から4-5では上記の調査・分析からの成果を課題ごとに示し、4-6ではそれらを教師養成プログラムにどう活かすのかを考察した結果を示す。

4-1. NNTの教育実践に表れるNNTの特性

川上他(2021)及び高梨(2024)では、多様な教育現場で教えている非母語話者教師の教育実践やニーズなどを明らかにした。川上他(2021)では、日本に留学経験があり中国・韓国で日本語を教えるNNT3名に対しインタビューを行った。その結果、インタビューでは、非母語話者の利点として、学習者としての経験と学習者の理解を確認・促進するための母語の使用が指摘され、困難点として「説明」・聴解・会話の授業や最新情報の入手及び日本語の維持が挙げられた。利点についてはこれまでの先行研究と同様の結果となったが、困難点としては先行研究では単に日本語能力と日本語教授能力とされているところ、具体的な状況や特定の科目について不安や困難を感じていることがわかった。また、利点として挙げられた学習者としての経験の内、学習者として経験した教え方に関しては、3名とも初めての授業での教え方として取り入れていたが、その理由はそれ以外の教え方がわからなかったということであり、教え方がわからないことは、初めての授業での不安と緊張に繋がっていた。学習者として経験した教え方が役に立ったと肯定的な評価がされることもありながら、同時に教師が学習者として学んでいなかったことについて教えることが難しいことも指摘された。この教え方については、3名ともに重視しており、教師となり、教えることの難しさを実感しつつも、それぞれ教え方の改善や工夫を試みている。

高梨(2004)では、日本の大学院を修了し、中国の高校で教えている3名の中国人日本語教師(以下、CT)を対象に半構造化インタビューを行い、音声データを文字化した資料をM-GTAを用いて分析した。その結果、CTの日本語教育の基礎は、大学院・養成講座のカリキュラムを軸とする日本での学びによって形成されたことがわかった。学んだ日本語教育と現在教えている日本語教育現場からの要求とのずれがあるが、学びと現場との不一致による葛藤から適応へのプロセスが見られ、教師らしさの獲得を果たしていた。また、学びの実践と向上心も見られたが、これはCTの歩みの出発点である日本語教育への志望に支えられて持続しており、教えるための知識の深まりへとつながっていた。

また、川上(2023)では、多言語多文化環境で教えるNNT3名に対しインタビューを行い、M-GTAを使い、多言語多文化性という観点から、日本語教師の持つ多様な言語資源を活かした教育実践がどのように行われているかを分析した。その結果、次のようなことがわかった。NNTの日本語教育実践プロセスには、常に多様な言語・文化と日本語・日本文化を比較する視点があった。NNTはもともと日本語だけでなく、言語そのものへの興味を持っており、日本語の学習時から常に日本語以外の他言語と比較して日本語の特徴を見ていた。実際に日本語を教える中では、教室で多言語多文化を活用しており、教授言語を効果的に切り替えていた。学習者の言語の多様性も考慮しており、学習者の第一言語や日本語学習プロセス(継承語か外国語か)の違いを考慮し学習者の言語リソースを活かす教え方をしていた。一方では、NNTは継続的な学習者としての側面を持ち、学習者としてのプロセスを経て日本語を教えていた。NNTは日本語を学習して身に付けてきたが、学習者・教師という2つの立場においてノンネイティブの限界の克服を試みていることがわかった。

4-2. NNTの不安

朴(2023)では、NNTの不安に着目をし、その解消に向けて考察を加えた。日本で博士号を取得し、国内の大学または日本語学校で日本語教師をしている4名のNNTを対象に約1時間の半構造化インタビューを行い、発話をテキスト化したものを分析対象とした。分析方法としては、質的内容分析を採用した。その結果、以下のことがわかった。まず、NNTとしての不安として挙げられたのは、a)教え方に関する不安、b)授業運営に関する悩み、c)日本語能力の不足、d)NNTであることに対する学生の認識に関する不安、e)日本国内の日本語教育における母語話者の優位性であった。これらは、日本語教師としての不安(a、b)とNNTとしての不安(c、d、e)に二分することができる。次に、NNTとしての不安は、a)授業の実践、b)今も学習者であるという意識と行動、c)学生からの肯定的なフィードバックによって軽減・解消されることがわかった。aとbは、NNT自身による主体的な取り組みとして、cは、その取り組みの結果として得られたものとして捉えることができる。

不安の克服方法のうち、a・bは、それぞれ多様な形で実践されている。これらも、不安と同様に、日本語教師としての克服方法と非母語話者教師としての克服方法に分けられそうであるが、「非母語話者教師としての強みを意識した授業の実践」、「日本語能力の不足を補うための努力」を除いては、日本語教師一般に必要な資質や能力であるとも言える。最後に、NNTであることの負い目は、日本語教師としてどのように成長してきたかに関するインタビューの中で、「非母語話者教師であることに対する学生の認識に関する不安」という形でどのNNTにも現れていた。しかし、いわゆる「初任」の頃に出やすく、授業経験と、その過程で得られる学生からの肯定的なフィードバックの積み重ねにより軽減・解消されている。

4-3. NNTの利点

川上・朴(2023)及び川上・朴(2024)では、これまでのNNTの利点に関する先行研究とNNTに対して行ったインタビューデータから、NNTの利点を枠組みとして示すことを試みた。そして、母語・文化の共有の有無により三つの異なる環境でそれらがどう表れるかを、仮説と実

際のデータによって示し、教授環境によって利点の捉え方がどう異なり、その共通項は何か、考察した。その枠組みと結果は次の表1のようになった。教授環境によって異なるNNTの利点としては、「A-1. 母語・共通言語が同じである」と「B-1. 同じ文化背景を共有している」で海外のNNTの利点が出やすいと考える。一方、教授環境の違いに関わらず共通して見られるNNTの利点としては、「A-2. 日本語が母語ではない」「B-2. 日本語学習者としての経験がある」があった。ただし、それにはNNTが意識化しているかどうかの違いにより、利点として把握しやすいものと把握しにくいものがある。意識されやすいものには、「B-2. 日本語学習者としての経験がある」があったが、あまり意識化されていないのは、「A-2. 日本語が母語ではない」に関わる利点であった。

表1 NNTの利点と教授環境による違い(川上・朴 2024: 29)

場所		海外1	海外2	国内				
学習者と教師間での言語・文化の共有の有無		言語・文化を共有		多様な言語・文化				
仮説/データ		仮説	データ	仮説	データ			
A 言語的 側面	A-1. 母語・共通言語が 同じである	①母語・共通言語による指導(教材作成を含む)ができる。	○	○	○	○	×	△
		②母語・共通言語との対照に基づいた指導(教材作成を含む)ができる。	○	○	○	○	×	△
		③安心感・親近感を与えられる。(母語・共通言語を使うことにより)	○	—	○	—	×	—
	A-2. 日本語が 母語ではない	①外国語として見た日本語の特徴をふまえた指導(教材作成を含む)ができる。(例:文法の指導)	○	—	○	—	○	○
		②日本語に対して情熱がある。	○	○	○	○	○	○
		③日本語の多様性を伝えることができる。	○	—	○	—	○	○
B 背景的 側面	B-1. 同じ文化背景を 共有している	①文化の違いに基づいた指導(教材作成を含む)ができる。	○	—	△	○	×	—
		②学習者の思考傾向・興味関心・学習スタイルがわかり、それに基づいた指導(教材作成を含む)ができる。	○	○	△	—	×	—
		③安心感・親近感を与えられる。(例:言語行動の違いに関する説明がしやすく、学習者にも受け入れてもらいやす)	○	—	△	—	×	△
	B-2. 日本語学習者として の経験がある	①学習者が難しいところがわかり、それに基づいた指導(解決方法の提示・教材作成を含む)ができる。	○	○	○	○	○	○
		②学習するときの学習者の心理状態がわかり、指導(解決方法の提示・教材作成を含む)に活かすことができる。	○	○	○	○	○	○
		③学習者としての経験による教育方法を指導(解決方法の提示・教材作成を含む)に活かすことができる。	○	○	○	○	○	○
	B-3.留学生・生活者として日本国内での経験がある	④学習者の目標・動機付けとなることができる。	○	—	○	○	○	○
		⑤安心感・親近感を与えられる。	○	—	○	○	○	—
		①海外生活、留学生生活の経験に基づいた、生活・学業面でのアドバイスができる。	△	—	△	○	○	○
	②学習者の目標・動機付けとなることができる。	△	—	△	—	○	—	
	③安心感・親近感を与えられる。	△	—	△	—	○	—	

4-4. 教師養成プログラムの実施状況や課題

古川編著(2024)に所収されている「日本語教育実習体制構築と実践」(高梨他 2024)では、一つの大学内の複数の学部・大学院で設置されている日本語教師養成プログラムのカリキュラムについて詳述し、日本語教育実習の実施体制について状況と課題を明らかにした。学部レベルでは受講生の基礎知識の不足と実習回数や実習できるレベルの制限、大学院レベルではオンライン・対面形式での実習による実習生の負担が課題として挙げた。その課題の解決のためには、実習生・実習クラスを受ける留学生双方の事情を考慮するとともに、科目担当者間や科目担当者の実習受け入れ担当者との連携が必要であることを指摘した。

4-5. NS 実習生と NNS 実習生の観点の違い

齊藤(2023)では、日本国内の大学院で学ぶ日本語教育実習科目受講生が、互いの実習をどのように評価しているかについて、評価者が日本語母語話者か非母語話者であるかという背景の違いに注目して分析した結果を報告した。NNS の評価には、NS と同様の点も見られたが、一

方で、NSの多くが指摘する一部の点には言及がほとんどなかった。たとえば、授業担当者の日本語の誤りや不自然さ、学習者に対する訂正フィードバックの不足のほか、NSが学習者の理解の支障になることとして言及する、授業担当者による話し方や表記上の課題がある。前者は、NNSの日本語の適切さの判断能力の不足に起因すると考えられるが、後者はむしろNNSの日本語能力の高さゆえに見逃してしまう点であると考えられる。これらのNNSが見落としがちな点については意識化を促す必要があることを指摘した。

4-6. 教師養成プログラムへの示唆

以上のような研究成果から、NNTの特性を教師養成プログラムにどう活かしていくかを考察し、以下のような示唆が得られた。

まず、NNTは教えることを重視しており、その知識やスキルの不足が不安にもつながっているという結果から、養成段階では教え方について学ぶことについて重点を置く必要があるということである(川上他 2021)。また、国内で養成プログラムを修了し中国で教えるNNTへのインタビューからは、彼らの日本での学びが中国での日本語教育実践を支えており、特に大学院で得た本質的な学びは彼らの実践の土台となり、現場の違いを超えて学びを活かすことが行われていることがわかった。このことから、どのような現場にあっても教師を支えられる学びとは何かを追及する必要性や大学・大学院における教師養成プログラムの強み(広範な学問領域についての高等教育を基盤とする)を活かす方向性についても示唆が得られた(高梨 2024)。

また、川上・朴(2024)では、NNTの利点について考察を加える中で、教師養成プログラムに対し、以下の3つの提案を行った。

媒介語の効果的な利用

NNTの利点として、特に海外では媒介語の効果的な利用が挙げられており、具体的には、文法を教える際や初級レベルのクラスでの利用について言及されていた。しかし、日本国内では教師と学習者が共通の言語を持たないこともあり、教師と学習者が共通の言語を持つ場合でも教室内では媒介語が使用されていなかった。日本国内での日本語教師養成プログラムでは、日本語を使用して日本語を教えるという直接法が一般的に取られていると考えられるが、日本国内での日本語教師養成プログラムに参加する受講生は、プログラム修了後、国内か海外かを問わず、日本語教師となる例が多い。このことを考えると、国内での日本語教師養成プログラムにおいても、媒介語を効果的に利用する教え方について学ぶ機会は必要であろう。教壇実習では難しい場合でも、海外で使用される教科書を分析する授業や多様な教授環境で教えることを想定した教案作成などは、実施可能ではないだろうか。その際、どのようなレベルでどのような内容の際に媒介語を使った方がいいのか、効果的な利用に目を向けさせる必要があると考える。

母語・共通言語を中心とした言語の比較

日本語と母語・共通語を比較して教授できるという利点については、NNTに言語学や文法の専門知識がある場合に言及されている傾向があった。つまり、NNTであれば自然に母語や他の言語と日本語を比較して、それを教えることに活かせるというわけではなく、言語学一般の知識や言語を比較・対照するための知識やスキルが必要となる。文化庁の教師養成の指針には、一般言語学・対照言語学が教育内容に含まれているが、日本語を母語とした受講生にとっても、日本語を他言語と比較し、特徴を捉えることは重要であろう。

また、日本語非母語話者受講生の場合は、日本語を外国語として見るができることができる一方、母語の特徴を捉えることが難しい場合がある。母語を一般言語学に落とし込み、母語を外から見る視点や意識を醸成することも必要であろう。

NNTの利点の意識化

NNT自身が考察で見たような利点を活かすためには、自身がそれを利点であると意識することが重要であると考えられる。朴(2023)では、NNT自身が学習者のロールモデルになりうるという利点を意識するようになったきっかけが、自身が教えている学習者からのフィードバックであったことが指摘されている。このようなフィードバックも重要であるが、日本語教師養成プログラムにおいても、多様な形でNNT自身がNNTの利点を意識することを促していく必要がある。

特に、国内での日本語教師養成プログラムにおいては、日本語母語話者をモデルとし、国内での日本語教育の文脈にあった教え方・内容が中心となる傾向があるため、NNTの学習者経験や日本語が母語ではないということなどは、利点として意識されにくいと思われる。日本語教師養成プログラムで、本稿で示したような利点の枠組みを示すことも一案であろうし、NNTの背景も含めた多様な教え方や多様な日本語教育の形をできるだけプログラムの中に取り入れることが重要ではないだろうか。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 川上 尚恵、齊藤 美穂、朴 秀娟、高梨 信乃	4. 巻 5
2. 論文標題 海外の大学で教える非母語話者日本語教師が必要とするもの：非母語話者の特性を考慮した日本語教師養成プログラム構築に向けて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 神戸大学留学生教育研究	6. 最初と最後の頁 1～21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24546/81012822	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 川上 尚恵、朴 秀娟	4. 巻 8
2. 論文標題 教授環境の違いをふまえた非母語話者日本語教師の利点：国内の日本語教師養成プログラムへの提案に向けて	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 神戸大学留学生教育研究	6. 最初と最後の頁 25～42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24546/0100488646	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高梨信乃	4. 巻 30
2. 論文標題 中国の高校で教える中国人日本語教師の教育実践 日本での学びとの関係に注目して	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 関西大学外国語学部紀要	6. 最初と最後の頁 135～147
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 朴秀娟
2. 発表標題 日本国内の非母語話者日本語教師が抱く不安に関する考察 非母語話者教師の不安の軽減を目指して
3. 学会等名 2023年度日本語教育学会春季大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 川上尚恵
2. 発表標題 多言語多文化性という観点からみたノンネイティブ日本語教師の資質・能力と教育実践 マルチリンガル環境で教える教師へのインタビューを通して
3. 学会等名 2023年度日本語教育学会春季大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 齊藤美穂
2. 発表標題 日本語教育実践のピア・レビューに見られる日本語非母語話者の観点
3. 学会等名 CAJLE2023年次大会（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 川上尚恵・朴秀娟
2. 発表標題 非母語話者日本語教師の利点を日本語教師養成プログラムにどう活かすか
3. 学会等名 CAJLE2023年次大会（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 高梨信乃
2. 発表標題 中国の高校で教える中国人日本語教師が必要とするもの
3. 学会等名 CAJLE2023年次大会（国際学会）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 古川 智樹編著	4. 発行年 2024年
2. 出版社 関西大学出版部	5. 総ページ数 276
3. 書名 ポスト・コロナ時代の留学生教育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	朴 秀娟 (Park Sooyun) (10724982)	神戸大学・グローバル教育センター・講師 (14501)	
研究 分担者	齊藤 美穂 (Saito Miho) (20580658)	神戸大学・グローバル教育センター・准教授 (14501)	
研究 分担者	高梨 信乃 (Takanashi Shino) (80263185)	関西大学・外国語学部・教授 (34416)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------